

発達障害、子どもの心身症を考えてみる

1. 発達障害

小さな子どもが言うことを聞かない、何でも泣きわめいて主張するのはよくあることです。また、大人が真っ向からそれに対抗して、無理に力づくで言うことを聞かそうとすると、大人が自ら『我を張ること』をわが子に体で教えてしまい、子どもはそれをナチュラルに身につけてしまいます。

自己主張をすることも・・・我を張る子ども、動かないことを思い切って子どもに譲り、考えさせる時間を取る方が『急がば回れ』です。いったん「どうしても〇〇したいんだね。」と譲ってみること、そしてそれをそうしてしまえばどんな困る事態が引き起こされるかを見てもらい、その結果を「どうしよう・・・。」と困ってみせる、そして子ども自身に考えてもらうことです。それにより、三歳前の子どもでは潜在意識の中に、またそれ以降では表の意識の中に『親とは子どもの人生の壁、障害物』という概念を埋め込んでしまいます。

小さな子どもは小さいなりにいろんな事態を理解できるし、非常識ではありながらもそれなりによく考えているものです。大人の側から『こうである』と押し付けるのではなく、できるだけ大人と物事を共に考えるようにしていくと、その上で小さな子どもなのに小さいなりの見方、理解を話したり、小さな子供の側からもしつかりした意見を出せるようになります。もちろん単に『こうしたい』『これがほしい』というのも自我ですが、理由を聞き、親の意見も出し、その上でどうすればよいか・・・や今後の双方の希望を合わせて話していくとよい自我も育ち、又常識も身につけ、なによりうれしいことは『機転や融通の利く子ども』『集団の中での潤滑作用を持つ子ども』として発達していきます。

今、子どもが小学生ともなると大人達の気持ちに沿ってこなくなった理由・・・家の大人のみならず学校の先生への反抗も含めて、幼児期に埋め込まれたこの条件反射的反應の流れもあるのです。「オトナハボクタチノシタイコトヲジャマスル」「オトナハボクタチヲシハイシテモ、ケッシテボクタチヲリカイハシナイ・・・。」そして同じ葛藤を持つもの同士の中に家庭の中では得られない共感を求めて集い、あるいは自分のさみしさを刹那的にも埋める存在を同性、異性の中に追いかける人生になりがちです。

2. 子どもの心身症関連

同じく小学生や中学生で勉強をしない、大人と口を聞かない、大人のいうことを聞かない・・・なども、子どもがすでに親についていなくなってから親が権力をふるったところで事態は一層複雑に悪化するだけです。

人と仲良くできない、うまく話せない、友達ができない～緘黙症（言葉が出なくなる症状）なども、子どものころからいつも親に嫌われることを恐れて生きた幼児期、学童期が

あり、また親の「そんなだと友達に嫌われるよ、バカにされるよ・・・」などの言葉に人間社会をさらにおそれるようになり、しゃべる口が萎縮してしまった結末です。

つまり親としては子どもが社会で生きていきやすいように・・・と懸命に教え込んだしつけが裏目に出て萎縮を産み、社会拒否や社会恐怖をもたらしてしまうのです。

学校に行かない状態に対し、最近の医療では①自閉症関連状態②ADHDによる適応困難③アスペルガー障害④うつ病の初期症状⑤統合失調症の初期症状・・・などとして薬物治療の対象になりがちです。

しかし①②③、すなわち『脳の高次機能障害』と簡単に言われながらも実際に本当にそうかどうかはよくよく見るとはなはだ疑問であり、親との間に『親や大人を受け入れられない状況』が存在することが多く、それらの確執を取り除くと、なんとまあ、理解と受容のある親を待ち焦がれていた素敵な親思いの子どもが出てくることでしょうか。

拒食症なども患者である子ども達を『無月経～子宮の萎縮～不妊症』で脅し、家の中で親から逃れるためのゲーム、スマホやインターネットなどのデジタル機器は『目が悪くなる～スマホ老眼』で脅すなどが多く、なぜスマホやネットに没頭するかに目を向けずに親の目の前からその目障りな症状を排除するための脅しの治療では子どもはますます大人に背を向けてしまいます。

子ども達の個人的な性的問題も、親の入ってこない世界だからこそ、これまでも『私の親であるのに私の心の葛藤も見ずに支配した』わが親に対し、『親のテリトリーの外である性的世界でやっと自由を広げられる』解放感、さらにこれまで自分を支配していたつもりで大人への報復感で気持ちを満たされ、事態はどんどん深みにはまっていくものです。

いずれの問題も大人の厳しい監視、指導、脅しは逆効果であり、また決して『脳を活性化する錠剤』『落ち着かせる錠剤』という薬物で彼らの葛藤が消えることはありません。

どうやって今子ども達に『保護者』『親』として認められ直すか・・・です。それは決して子ども達に対して従順・卑屈になることではありません。まず子どもの心理状態をこどもの態度や言葉から知り、その上でその子どもの心がそれぞれ必要としている『親の心地よさ』を提供することで子ども達の方から寄り添ってもらえる親になることです。

育児、まして心の治療に大切なことは、子どもの心理とその背景、何が子どもの葛藤を作ったかを知り、それに大人自身の側からしっかりとメスを入れることです。

その時にはそれまで大人が持っていた価値観すべての方向転換せざるをえない事も多く、親が苦しい立場になることもあります。子どもはよくそれも見ていて、それでも子どもの側の苦しさを救うために親の側が譲って耐えてくれる親であったときに子どもから親は共に生きる人生のスタッフとなり、成長した子どもから大きな幸せ、喜びを長く受け取るものです。